

沖縄視察旅行の感想

私は以前から沖縄の基地問題に関心を持っていた。しかし、内地ではその情報入手に関して限界があり、現地を一度見てみたいと思っており、今回、参加させていただいた。

出発前日、保団連から送られてきた今回の要綱には、キャンプシュワブのテント村での座り込みが計画されていた。私がこの企画に参加するのは、基地建設反対のためではなく、基地視察が目的である。申し込みの説明文には、基地反対運動とは書かれていなかった。座り込み計画を事前知っておれば、たぶん応募しなかっただろう。

夜の11時に着いた那覇空港でまず感じたのは、若者の喫煙者がとても多いということであった。沖縄中部病院で2年間の研修をしている医師から、タバコのせいでCOPDの高齢者が内地に比べて沖縄にはとても多いということの意味が納得できた。

翌朝8時から、名護市のキャンプシュワブで何年にもおよびテントをはって抗議活動している人々の話を聞いた。その海はとても美しく、現地の人々が自然を残したいという気持ちをよく理解できた。しかし、自然破壊ということで基地反対を訴える沖縄の一部の人が、海岸付近でたばこを溝に捨てていたのを見て、なんともいえない気持ちになった。

午後の島北部のヘリポート見学では、広大な敷地が、アメリカ軍のジャングル戦闘訓練のための基地であることをきいてびっくりした。基地面積が沖縄本島の20%というのも体感できた。アメリカ軍はこの広大な敷地の賃貸料を負担していないとのことであった。

夜に、仲里先生から、経済的に基地には負っていない沖縄の現状と、普天間基地が撤去されたとの想定時の経済効果が提示された。私は質問した。「そのデータが正しければ、基地が撤去されたら、経済的な発展を遂げるかもしれない。それが実現した場合、沖縄をどう守るのか？中国が攻めてくるかもしれないという不安はないのか？」と。彼は、「沖縄は中国と歴史的に友好関係があり、中国と敵対する阿部外交ではなく、友好的な外交を行えば、日本に攻めてくることはない」と返事された。

アメリカ軍を日本から撤退させ、自衛隊のみで本当に国防ができるだろうか？戦争をしないで平和をめざすと宣言する外交だけで、他国から侵略されることはなくなるのだろうか？どこかの国に侵略されたら、国連は迅速に判断して、我々を守ってくれるのだろうか？

翌日、見学した普天間飛行場の周りに民家が多く建っていた。もし、ここがアメリカの州ならば、アメリカの条例により危険区域とされ、基地周辺には

建物は建てることができないとのことであった。第二次大戦後、アメリカ軍がこの土地を略奪して飛行場を建設した後に、沖縄住民が帰ってきて、自分の土地に住居を建てたと説明を受けた。例えそれが先祖伝来の土地であっても、私なら、将来の危険を感じて別の地域に住み移っただろう。そんな選択もないくらい、普天間の人たちは貧しかったのだろうか。

2004年に起こった沖縄国際大学へのアメリカ軍ヘリコプター墜落事件やオスプレー導入の、「夜間には飛ばない」約束に対する、日本の主権を覆すような出来事をきくと、沖縄県民が、大戦後から堪え忍んでき、アメリカ軍を何とかしてほしいというのは十二分に理解できた。

基地反対運動しているのは、本土の人ではなく中国人や韓国人が多いという報道に関して、基地反対の2人の沖縄の人に尋ねたが、そのような人をみたことがないとのことだった。しかし、この視察旅行で、解散した県庁前で、2人の男女が、中国に対する警戒を拡声器でアピールしていた。[新しい知事は、中国共産党所属で、将来沖縄を乗っ取ることを考えているので注意しなければならない]と。

今回のことで特に感じたのは正確でかつ中立な情報を得ることの難しさである。不十分かもしれないが数ヶ月くらい沖縄にすんで、現地の人たちと仲良くなって、はらをわって話をしないと正確な情報はつかめないのではないかと思う。

参加していろいろなことを理解できたし、自分なりに問題点も整理できた。そして、この沖縄問題を解決することは、背景が複雑で、とっても困難であることを実感した。